

参議院選挙の年 古賀ちかげさんを国会へ



日本退職教職員協議会
会長 竹田邦明

コロナ禍で3年目を迎えます。会員のみなさまには新しい年をいかに迎えられるでしょうか。各単会では感染対策を最大限とっての活動にご苦労されていることと思います。行動が制約され、仲間との交流ができないことは特に私たち高齢者にとってつらいものです。

今年も参議院選挙の年。選挙で勝利し、原発を再稼働し、辺野古新基地建設を進め、格差・差別を容認する政治を変えましょう。教育現場を知る古賀ちかげさん(全国比例)、斉藤よしあきさん(愛知選挙区)の必勝を期し、行動しましょう。

日本退職教職員協議会

No. 400

2022.1

日本退職教職員協議会

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋二一六一二 日本教育会館6F
発行責任者 竹田邦明
TEL 03(5275)2197 FAX 03(5275)2081
Email nitaikyoyo@gmail.com ホームページURL <http://www.nitaikyoyo.com>

総選挙を振り返れば

「モリ・カケ・桜」に象徴される「公文書改ざん」「権力私物化」。とても民主国家とは思えない政治状況が10年も続きました。しかし、昨年10月の衆議院選挙ではこの政治の変化を求める声は議席に反映されることはありませんでした。昨年9月自民党総裁選挙を前に、マスコミ、特にテレビ・ワイドショーは連日自民党総裁選の話題を流し続けました。あたかも政治がいい方になるかのように。新首相に選任された岸田氏は国会での論戦の機会を全く作らず、総選挙に打って出ます。「野党は批判ばかり」「野合」の声(与党、一部野党、メディアそろって)に覆いつくされ、統一候補の政策は全く取り上げられず、立憲野党は議席を大きく減らしてしまいました。数々の政治腐敗に対して、野党が批判するのは、次から次へと、とんでもないスキャンダルが噴出し続けたからで、当然です。「野党は批判ばかり」論は権力の不正を隠蔽したいという意図があると思えないものです。

教え子を戦場に送らない

選挙の結果、改憲勢力は3分の2を大きく超えました。自民党の改憲4項目「緊急事態条項の新設」「教育の充実」は法律と行政の執行で済む話です。「参院合区の解消」は議員の既得権益保護と言えます。となると「自衛隊加憲」案が「世論の支持を得て」提案されてくる可能



古賀ちかげさんと斉藤よしあきさん

動きや、夏の参議院選挙に同時改憲国民投票を言う政党もあり、「改憲機運」の拡大を警戒します。私たちは改めて「教え子を戦場に送らない」ために活動します。

政治の流れを変えよう

高齢者人口は、2040年代に団塊の世代ジュニアが加わり、3900万人になると推計されています。社会保障制度の在り方は、ともすると世代間対立に巻き込まれやすい課題ですが、全世代で今とよりくまなければなりません。少子高齢社会の雇用対策、ベーシックサービスの充実を「ジェンダー平等」(2021年新語流行語大賞に選ばれましたが)を基盤に置きながら、構築することが求められています。参議院選挙勝利で政治の流れを変えましょう。

400号記念全会員配布号

東日本大震災から10年、宮城・岩手の旅

2021年度は、東日本大震災から10年という区切りの年でした。今回の参加者は、岩手県退1、岩手高退3、宮城退2、山形県退1、福島退1、埼玉退1、千葉県退2、千葉高退1、都退教1、都高退1、神奈川県高退3、石川県退1、石川高退1、広島高退1、徳島退1、沖縄高退1、事務局3名の計25名でした。2名の方の報告を掲載します。

再訪雑感

沖繩高退教 安次嶺 美代子

衆議院議員選挙直前の10月30日、那覇を立ち東京へ。翌31日、仙台駅で日退教「宮城・岩手学習交流の旅」参加者24名と合流した。東京でもそうだったが、着いて驚いたのが現地の気温だ。沖縄の半袖シャツから長袖に変わった程度の体感温度に拍子抜けした。

さて、仙台駅で乗り込んだバスは高速を走り、石巻市大川小学校へと向かう。10年前の東日本大震災で児童・教職員84人が死亡、行方不明になった川沿いにある学校だ。2013年にも訪れた場所である。バスの車窓から流れゆく街並みや山の景色を楽しんでいて、ふと、気づいた。沿道で途切れることなく咲いている黄色い花に。8年前に訪れた時の記憶はない。いや、以前にも同じように咲いていたかも知れない。だが、その時は、街や沿道までが瓦礫に覆われていたという印

象が強い。それほどの惨憺たる状況だったのを憶えている。

ほどなく、大川小学校に着いた。そして、現地の仲間に教えてもらった。その花がセイタカアワダチソウだということ。大川小学校の校舎跡は津波が襲った威力をまざまざと見せつけるように遺されていた。学校周辺は整備され、校庭のすぐ傍には伝承館が建ち、津波の怖さと命を守るための教訓となる資料等が備えてあった。

翌日の陸前高田市も新しい街が誕生したような雰囲気の中、海側に近づく、初めてあの「奇跡の一本松」を確認した。ここにも、立派な伝承館が建ち、多くの見学者や学習



する中学生の姿があった。また、釜石鵜住居（うのすま）復興スタジアムの整備や小・中学校の新築など、被災地は確かに復興へと歩み続けている。震災前と比べ都市化した感さえある。同時に、新たな自然災害に備え、教育や社会インフラなどへのとりくみも加速させているようであった。

短い時間の被災地訪問であったが、被災2年目の惨状を見ていただけに、よくぞここまで復興できたものだと思嘆した。そのことを案内してくれた方に話すと「地域の人々の努力と相互扶助があったからです」との言葉が返ってきた。

宿に戻る途中のバスの中で、延々と続く防潮堤を眺めながらある想いが脳裡を掠めた。海とともに生きてきた人々が、海の見えなくなった生活を余儀なくされる。はたして、その生活に馴染むのだろうか、と。

一泊二日の旅程ながら有意義であった。今回の旅を企画して下さった日退教事務局の皆様へ感謝です。



「宮城岩手・学習交流会」報告

神奈川高退教 林 純夫

10月31日から11月1日にかけて宮城・岩手の被災地を宮城退教協と岩手県高退教の協力を得て駆け足で巡り学習・交流を深めた。参加者は25名。遠く沖繩・四国から参加された方もいた。13時仙台駅に集合し、貸切バスで最初に訪れたのは児童74人・教職員10人が津波の犠牲になった石巻市の大川小学校。誰もが抱く疑問は津波から逃げる時間は十分あったはずなのに、裏山に逃げることもできなかったのに、学校はなぜ子どもを命を守れなかったのかということだ。23名の遺族は2014年宮城県石巻市の法的責任を問う訴訟を起こし被告は控訴審判決を不服として上告したが、最高裁は2019年上告を棄却、仙台高裁の判決「平時から油断せず、津波の危険性を検討し、適切な避難場所を定め、訓練をしていれば、(中略)地震後早い段階で、安全な



奇跡の一本松

場所への避難が可能だった」(原告側勝訴)が確定した。市教委から宮城県沖地震による津波に備えた危機管理マニュアル

アルを作るよう指示があったが、大川小から提出されたのは机上のマニュアルで、教職員集団は避難場所検討の議論に参与する機会もなければ、マニュアルの存在すら知らされていなかった。宮城退教協の酒井孝夫さんは「行政・学校管理職・教職員集団という三者関係の官僚化と集団討議の欠如化が克服されなければならぬ。職員会議を「最高の意思決定機関化」することなく校長の上意下達を推し進め、職員が自主的に判断したり討議したりする場をなくし、指示待ち症候群にしていたのではないのか。避難先のマニュアル作りの討議を全体で行い、避難訓練を行っていたならばこの悲劇は避けられたのではないか」と話された。

その日は大船渡プラザホテルに宿泊し二日目震災遺構に残された津波到達点の高さを確認しながら最初に訪れたのは岩手県陸前高田市の東日本大震災津波伝承館。開館前に解説員の吉田さんから避難場所の説明を聴く。「二度と東日本大震災津波の悲しみをくり返さないために」伝承館は作られた。館内見学を終えた後、バスガイドさんを先頭に「奇跡の一本松」から海を望む場へ移動し、そこで全員黙祷、犠牲者を追悼した。

陸前高田ICから釜石北ICまでバスで移動し鶴住居トモス駐車場で釜石市観光ガイド会の菅原さんと合流。菅原さんから震災当時、「釜石の奇跡」と言われた鶴住居小学校・釜石東中学校の学校管理下の児童生徒570名がなぜ津波から逃げ切れたのかという話を



あなたも逃げて

伺った。それは奇跡などというものではなく、津波常襲地帯における2006年来続いてきた生きるため親や地域を巻き込んだ防災教育の成果であるということだ。

私は、「津波でんでんこ」というのは自分の命を最優先に逃げるということだけではなく、それを家族が信じ合っている、そんな準備を普段から怠るなということを教えられた。巨大地震に対する備えはできているのか？学びの多い交流会だった。紙面の関係で割愛させていただいたが、宮城・岩手の学校被災状況と教組の活動をわかりやすく学習資料としてまとめて下さった宮城退教協と岩手高退教の皆さまに改めて感謝申し上げます。さらに岩手県高退教の吉田矩彦会長から後日、研修の旅の記録をDVDとしてまとめていただき、送っていただきました。何から何まで至れり尽くせりで、この学習交流会の成果を伝えていく責任を痛感しています。ありがとうございました。

■スローガン■

- 1. 恩給・年金の完全スライド制をかちとろう!
- 1. 退職者・高令者への社会保障・福祉対策を充実させよう!
- 1. 退職教職員の組織化をいっそうすすめて運動を強化しよう!
- 1. 日教組とともに力づく歩もう!

全国退教協ニュース

創行日 1973年11月1日
 発行所 東京都新宿区中落合3-16-13
 ホワイトビル内
 (Tel) 950-3111
 編集発行人 退職教職員全国連絡協議会
 事務局長 大庭和夫

No. 1

退教協通信

一九七八年九月四日

退職教職員全国連絡協議会

日退教通信

No. 93

1986・9

日本退職教職員協議会
 東京都千代田区二ツ橋二六二二 日教組内

第十五回定期大会

日退教と名称変更

全国退教協 第15回定期総会



日退教の前身である全国退教協が結成されたのは、1973年(昭和48)9月14日でした。その年の11月に全国退教協ニュース第1号が発行されました(残念ながら現在見当たりませ

ん)。退教協ニュース2号には、75年第3回定期総会が開催され、小林武さんを初代会長に選任し、組織の形を整え、本格的な退教活動に入った、と記されています。全国退教協ニュースは第4号まで発行され、78年に「退教協通信」と改題され、現在の400号に続く、第1号が発行されています。

1号の記事は「昭和54年度恩給改善主要項目」の情報提供でした。その後、86年の第15回総会で、全国退教協が日退教と組織名称の変更が行われたのを機に、「日退教通信」と改名、今日に到っています(日退教通信93号、題字は現在まで同じ)。100号は1987年5月、開催された常任委員会での「財政確立」の議論の様子を報告しています。200号は1997年4月、第26回定期総会の議案を掲載、300号は2008年3月、3面に「後期高齢者医療制度の廃止」を求める取り組みが報告されています。B4縦書き裏表の紙面から現在の体裁(A3二つ折り、4面構成)に変わったのは245号(2001年11月、トップ記事は「アメリカは(アフガン)攻撃を中止し、平和的解決の道を探れ」)からです。200号記念号に「広報の役割は、年金や医療などの制度、法案について中央の動きを会員の皆さんに的確に伝えることが第一だと思えます。その意味では、広報は組織体の血液の役割を果すといっても過言ではありません」とありました。今後も広報部会は会員のみなさまの期待に応えられる紙面づくりに努めていきます。

◆編集後記◆

毎日新聞11月24日朝刊に以下のよ
 うな記事があった。沖縄の本土復帰を
 翌年に控えた1971年11月17日、琉
 球政府の屋良朝苗主席は「基地のない
 平和の島としての復帰」への要望をま
 とめた「建議書」を手に東京へと向かっ
 たが、その建議書を政府・国会に届け
 ようと羽田空港に降り立ったちようど
 その頃、沖縄返還協定の承認案を自民
 党が衆議院の特別委員会抜き打ち的
 に強行採決したというのだ!

この記事が掲載された翌25日、玉
 城デニー沖縄県知事が、辺野古の埋め
 立て工事の設計変更を不承認としたと
 発表した。玉城知事は、軟弱地盤につ
 いての調査やジュゴンなど自然環境保
 全のための対策が不十分であることに
 加え、沖縄南部の遺骨が残されている
 場所から採取された土を埋め立て工事
 に使用することは人道に許されないと
 語ったという。

今後、辺野古が唯一の解決策とす
 る政府と沖縄県の対立激化が予想され
 るなか、今年の名護市長選、参院選、
 沖縄県知事選が行われる。先の衆院選
 では辺野古を含む沖縄3区で「オール
 沖縄」候補が敗北し、陣営も立て直し
 を迫られているが、同時に復帰後50年
 にわたって基地を沖縄に押しつけてき
 た本土の人間の責任も問われなければ
 ならないだろう。(M)